

2020年11月1日

Daigas ガスアンドパワーソリューション株式会社代表
後藤 暢茂 様

(仮称) 苫東厚真風力発電事業に対する意見書

日本鳥学会鳥類保護委員会
委員長 北村 亘

日本鳥学会は、鳥学の発展および鳥類保護への学術的貢献を目的とする団体です。北海道の苫小牧市字弁天から厚真町字鹿沼にかけて、御社の計画されている(仮称)苫東厚真風力発電事業につきまして、提出された配慮書に基づき、鳥類保護の見地からの意見を申し述べます。

記

本風力発電施設事業の計画地を含む苫小牧市東部から厚真町、むかわ町にまたがる勇払原野は、水鳥類の世界的に重要な生息地であるラムサール条約登録湿地のウトナイ湖を有するほか、計画地の西側と東側の二区域は重要野鳥生息地(IBAs) A4i(日本野鳥の会 2010)および生物多様性保全において重要な地域(KBA)に選定されている。これらの選定区域は、希少種を中心とした野生動植物の重要な生息地として世界中に認知されているが(日本野鳥の会 2010)、多くの生物種や個体群は選定区域内だけで維持されているものではなく、自然度の高い湿原や草原、湖沼、河川などを含む周辺域も利用して生息している。

本事業計画地やその周辺で調査を実施している日本野鳥の会の未発表資料((公財)日本野鳥の会 勇払原野保全構想に係る対象範囲南部・重要鳥類生息データベース:以後、日本野鳥の会(未発表資料))によれば、たとえば法的な保護対象種である国内希少野生動植物種および天然記念物に指定されている鳥類として、マガン、タンチョウ、シマクイナ、ヘラシギ、オジロワシ、オオワシ、チュウヒ、ハヤブサなどが確認されている。それ以外にも、環境省および北海道のレッドリスト掲載種が多数、計画地内で生息していることが確認されている。

本事業計画地は上述したラムサール条約登録湿地、IBAおよびKBAに挟まれた場所に立地する。これら選定区域は、動植物の重要な生息地として国内外に認知されており、その隣接地域にも自然度の高い湿原、草原、湖沼等がまとまって存在し、選定区域と連続した多様な動植物の生息地となっている。(仮称)苫東厚真風力発電事業は、このような保全上重要な生態系を

大規模に改変するものであり、この地域で長年保たれてきた動植物相にもたらす影響が極めて強いと予測される。そのため、苫東厚真地域における風車の建設計画を、中止も含めて全面的に再考するよう要望する。

現時点で計画地周辺での生息状況がある程度把握されている希少鳥類種のうち、とくに大きな影響が危惧されるものとして、タンチョウ、チュウヒ、オジロワシ、オオワシ、マガン、ヒシクイ、シジュウカラガン、オオジシギが挙げられる。配慮書では、文献調査や有識者へのヒアリングなどから、計画地やその周辺におけるこれらの種の生息または生息可能性について述べられており、事業想定地域の絞り込みによる IBA や KBA の除外をもって重大な影響は回避、低減されたと評価されている。しかしながら、既に公表されている、あるいは未発表の資料やデータをもとにこれら重要な鳥類種への影響を検討すると、配慮書で示されている選定区域の除外によって重大な影響を回避・低減することは困難と考えられる。

以下に、各種に対する本事業の与え得る影響と保全に向けた意見を述べる。

チュウヒ

絶滅危惧 IB 類、国内希少野生動植物に指定されているチュウヒは、北海道の個体群の 1/4 以上が苫小牧市からむかわ町の湿性草原に生息するとされる。日本野鳥の会（未発表資料）によれば、計画地内には最大 7 つがいのチュウヒの営巣が確認され、他には類をみないほど高い繁殖密度や繁殖成功率であることから、国内外における最重要繁殖地のひとつであるといえる。一方、厚真からむかわエリアで繁殖するチュウヒの繁殖成功率は近年、低下傾向が示されており、風車建設による繁殖阻害要因の増大で繁殖状況がさらに悪化する可能性もある。以上のことから、当該地域のチュウヒの生息環境の維持・保全は北海道の個体群の存続のためにも非常に重要であると考えられ、風車の建設や環境改変は回避されるべきである。

タンチョウ

国内希少野生動植物種、国の特別天然記念物、絶滅危惧 II 類のタンチョウは、厚真川河口域から浜厚真湿地にかけてひとつがいの生息と営巣が確認されているほか、越冬個体も観察されている。近年では、主要な繁殖エリアである北海道東部では営巣数の過密化により繁殖適地がほとんどなくなり、北海道中央（道央）圏や北部圏に分散して繁殖するつがいは、健全な個体群維持のためにも重要である。したがって、道央に位置する当該エリアで初めて繁殖を開始したこのタンチョウのつがいは極めて貴重なもので、その生息や繁殖を阻害してはならない。そしてそのためには、少なくとも営巣地を中心とする 3~4km² の範囲（正富・正富 2009）や、移動経路における風車の設置は回避すべきである。一方、酪農学園大学 2017 年度卒業論文研究（須田 2018；酪農学園大学卒業論文）によれば、このつがいの過去の営巣地と繁殖期前半

の行動圏は計画地内にあり、現在でも、このつがいやむかわ近辺で生まれた個体が計画地内や周辺域を利用していることがわかっている。計画されている風力発電施設の建設は、現行の繁殖つがいへの影響のみならず、潜在的な繁殖適地の消失や、周辺で生まれた幼鳥や越冬個体の風車衝突事故の発生をもたらす可能性があることから、タンチョウ個体群の保全上、大きな問題であると言わざるを得ない。

オジロワシ・オオワシ

国内希少野生動植物種、国の天然記念物、絶滅危惧Ⅱ類に指定されているオジロワシについては、計画地周辺エリアに3つがいの営巣情報があり、そのうちのひとつがいは少なくとも2014年以降、行動圏内に計画地が含まれる場所で営巣している。さらに、毎年2月に実施されているオオワシ・オジロワシ合同調査グループによるカウント調査では、計画地に隣接する鶴川下流域からむかわ海岸にかけて、例年、オジロワシと同様な保護指定種であるオオワシとを合わせて10個体前後が確認されており、計画地周辺の厚真川河口や海岸部周辺においても、越冬個体が生息している可能性が高いと考えられる。

オジロワシは国内外において、風車への衝突リスクが非常に高い種であることがわかっているほか、営巣地周辺における風車建設が繁殖成功率の低下や個体群の衰退を招くことも報告されている(Dahl et al. 2012)。個体群を圧迫する主要因となるこれらの影響を回避するためには、繁殖期であれば営巣地から半径3km以内の風車建設を避ける必要がある

(Krone and Treu 2018, LAG-VSW 2007, MUGV Brandenburg 2012)。一方、国内ではとくに越冬期にオジロワシの風車衝突事故が多く確認されており(白木 2012)、繁殖する留鳥のオジロワシや出生幼鳥に加え、渡り鳥であるオオワシ、オジロワシの越冬集団に対しても配慮が必要である。風車の塗装等による衝突予防策には十分な効果が確認されていないことから、少なくとも高頻度な飛行や利用のみられる場所での風車建設は回避されるべきである。

マガン・ヒシクイ・シジュウカラガン

国の天然記念物、準絶滅危惧種であるマガンを主とするガン類にとって、計画地周辺の厚真町やむかわ町は、主にウトナイ湖を畔とする春の渡り中継地として重要な場所である。

同地は国の天然記念物、絶滅危惧Ⅱ類の亜種ヒシクイの多数が集結し(宮林 1994)、最近では、国内希少種、絶滅危惧ⅠA類で、約40年に及ぶ個体数回復事業により5,000羽まで増加したシジュウカラガンの重要な中継地となっている(日本雁を保護する会 未発表データ)。先崎(2012)では、この地域の海岸部から内陸にかけての農耕地や水田、牧草地がガン類にとって重要な餌場となっており、厚真町内のいくつかの沼が畔となっていることや、海岸線を渡り移動する個体がいることなどが述べられている。また、計画地内にマガンの畔、

採餌場所、埤と採餌場所の間の移動経路があることも確認されている（日本野鳥の会 未発表資料）。これらのことから、この風力発電施設の建設はマガンやシジュウカラガンなどに対し、風車衝突事故のほか生息地放棄や移動経路妨害などの悪影響をもたらすことが予測され、計画地周辺を中継地として利用してきたマガンや復活し始めたシジュウカラガンの個体群の存続に重大な影響を与える可能性がある。

オオジシギ

準絶滅危惧種であるオオジシギについては、計画地内で多数が繁殖していることがわかっている（日本野鳥の会 2006）。一方、国内では本種のバードストライクが発生しており（浦 2015）、繁殖期にディスプレイフライトを行うオオジシギは、風車に衝突しやすい鳥類であると考えられる。したがって、計画されている風力発電施設の建設はオオジシギに対し、繁殖攪乱や営巣環境悪化による営巣地の減少や消失および風車衝突事故の発生をもたらす可能性がある。また、勇払原野では過去 15 年間でオオジシギの個体数の約 30%が減少した（浦ほか 2017）ことが報告されており、この施設の建設によりさらに個体群の縮小が進み、存続が危うくなる可能性も指摘される。

以上

なお、本意見に対する御社からのご回答をいただきたく考えておりますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

【連絡先】

日本鳥学会鳥類保護委員会 委員長 北村 亘
〒224-8551 神奈川県横浜市都筑区牛久保西 3-3-1
東京都市大学環境学部
TEL: 045-910-2590
email : kitamura@tcu.ac.jp

【引用文献】

- Dahl, E. L., K. Bevinger, T. Nygaard, E. Røskoft, and B. G. Stokke. 2012. Reduced breeding success in white-tailed eagles at Smøla windfarm, western Norway, is caused by mortality and displacement. *Biological Conservation* 145:79–85.
- Krone, O. and Treu, G. 2018. Movement Patterns of White-tailed Sea Eagles near Wind Turbines. *JWM* 82: 1367-1375; DOI: 10.1002/jwmg.2148.
- LAG-VSW. 2007. Abstandsregelungen für Windenergieanlagen zu bedeutsamen Vogellebensräumen sowie Brutplätzen ausgewählter Vogelarten. *Berichte zum Vogelschutz* 44:151–153.
- 正富 宏之・正富 欣之. 2009. タンチョウと共存するためにこれから何をすべきか. *保全生態学研究* 14:223-242.
- 宮林 泰彦. 1994. ガン類渡来地目録 第 1 版. 雁を保護する会. 若柳, 宮城.
- MUGV Brandenburg. 2012. Tierökologische Abstandskriterien für die Errichtung von Windenergieanlagen in Brandenburg (TAK).
- 日本野鳥の会. 2006. 野鳥保護資料集第 19 集 - ウトナイ湖・勇払原野保全構想報告書 - . (公財) 日本野鳥の会, 東京.
- 日本野鳥の会. 2010. 野鳥保護資料集第 27 集 - IBA 白書 2010. (公財) 日本野鳥の会, 東京.
- 先崎 理之. 2012. 胆振地方東部のガン類. *みんなでマガンを数える会 25 年周年記念誌*: 103-106.
- 白木 彩子. 2012. 北海道におけるオジロワシ *Haliaeetus albicilla* の風力発電用風車への衝突事故の現状. *保全生態学研究* 17: 85-96.
- 浦 達也. 2015. 風力発電が鳥類に与える影響の国内事例. *Strix* 31:3-30.
- 浦 達也・西林直哉・田尻浩伸・竹前朝子・中村 聡・葉山政治・大畑孝二・富岡辰先. 2017. 北海道勇払原野におけるオオジシギの繁殖個体数の変化. *日本鳥学会 2017 年度大会講演要旨集*.